



上映映画解説

1955, 3~4

国立近代美術館 フィルムライブラリー

No. 35

月例映写会について

国立近代美術館のフィルム・ライブラリーでは、内外古今の優秀映画の収集保存とその活用を努めております。今回は「明治初期洋画」展の期間中、月例映写会として次の短篇映画を選択し、毎週火・木・金・土曜日(日・水曜日は古典映画の鑑賞会)二時から上映いたします。

東京の“いちば” 一巻

提供 東京都
製作 東京都映画協会
東京ニュース第五四号

これは、都民の食生活をまかなうために、東京都で維持管理している築地の中央卸売市場のありさまを、鮮魚類を中心に時間を追って、“いちば”の一日の姿として捉えたものです。

浅間山

岩波映画製作所作品

この映画はほぼ次の五つの項目をとりあつかっています。

- 1、活火山浅間とその噴火の歴史
- 2、浅間山の活動とその影響のもとにある地域の実状及び人びとの生活
- 3、浅間山を例証とする火山の機能と地球の秘密
- 4、浅間山を対象とする火山研究の営みと労苦及びその成果
- 5、特に一九五三年の噴火とその後の火口の状態性格からいうとこれは科学映画に属しますがたとえ

ば、天明三年の大噴火の惨害を当時の画や実景で感性的に印象づけたり、実りすくない火山灰地における農民の苦斗をとりあげたりしているような行き方をとっている点で、ともすれば非情になりがちな科学映画とはかなりちがったものをもっていきます。それでいて科

学映画の本すじからすこしも逸脱してはおらず、火山と地球の神秘をしみじみと感じとらせたり、火山に関する科学的研究の意義とその日本の達成について力強く訴えかけたりする点でも成功をおさめています。(一九五四年度作、一六ミリ)

“之を女と名づくべし”

She shall be called Woman

製作・監督 ベルギーG・D・Bプロ作品
撮影 ジェラルド・ド・ボー
フランソワ・ラン
フレッド・ラン
音楽 アンドル・スーリ

この題名は旧約聖書創世記第二章二三節にあることばですが、この映画は、アフリカのコンゴ地方のニグロの芸術、特に木彫を紹介したものです。素材で稚拙に見える木彫りの人形が、この映画では、実に適確にいきいきと、人間の表情をあらわしていることを示しています。とくに、題名にあるとおり、女性がこの原始的なニグロの芸術の大きなモチーフになっていることが、ありありと示されます。神秘的な象徴としてだけでなく、日々の労働と母性愛とが厳肅な姿として、執拗に表現されるのです。

ここで私たちはニグロの木彫が現代の彫刻や絵画にあたえた影響を、意味深く味わうことができると思っています。(一九五三年作、英語版、ベルギー大使館提供、一六ミリ)

ゲルニカ Guernica

フランス・パンテオン・プロ作品
監督 アラン・レネー
脚本 ロベール・エツァール
脚本 ポール・エリヤール
朗読 マリア・カザレス
音楽 ギー・バルナル

これは一九四九年から五〇年にかけての製作ですが映画はまずピカソの「青の時代」の絵のヒューマニス

ム的な面からはじめて、ファッシズム——人間性のじゅうりん——に対するピカソの怒りが、大作「ゲルニカ」で爆発したことをダイナミックに表現しています。「ゲルニカ」はいまでもなく、スペインの内乱のとき、ナチス軍がスペインのフランコ軍を応援するため、スペインの無防備な小都市ゲルニカを無差別爆撃したことに対する無言の抗議として、戦争の惨害を大きな壁画風のタブローに描いたものですが、映画はこの作品をただ形式的に紹介するだけでなく、「ゲルニカ」が画家ピカソの中に生まれた、内的なプロセスをつよく動的にえがきだしています。そして最後に、ピカソが第二次大戦中につくった彫刻「小羊を抱ける男」がしずかに、威厳をもってうつつだされまます。この部分はおそらく今までの美術映画の中の圧巻といえましよう。(3月25日~4月2日)

ミゼレーレ Misereere

監督 フレデリック・デュラン

「ミゼレーレ」は、いうまでもなく一九二七年に刊行されたジョルジュ・ルオーの五十八枚の銅版画からなる版画集です。(4月5~9日)

コーガン Gauguin

フランス・パンテオン・プロ作品
監督 アラン・レネー
音楽 ダリュウス・ミロー

(4月12~16日)

ヴァン・ゴッホ Van Gogh

監督 アラン・レネー

(4月19~23日)

「ゴッホ」「コーガン」は、ともにフランス美術映画界の代表的な作家レネーの作品で、「ゲルニカ」とともに美術映画の戦後の新しい傾向を代表する作品といえます。この新しい傾向というのは、従来の単なる紹介・解説或いは記録としての美術映画から、美術作品を素材として映画的な表現に重点をおいたものが生れてきているのをいいますが、例えば「ゴッホ」でも、その作品を単に紹介するのではなく、映画独特のカメラ・ワークを用いて、ゴッホの人間の心理的な内容をえがきながら、彼の生涯を物語っています。「ゲルニカ」以下の四本は日仏学院の提供によるものです。